

HHhH

ヒムラーの頭脳はハイドリヒと呼ばれる

2019年2月

眞鍋由比

今月紹介したいのは

Himmlers Hirn heißt Heydrich「ヒムラーの頭脳はハイドリヒと呼ばれる」

『HHhH、プラハ、1942年』

ローラン・ビネ 東京創元社 2013年

HHhHってあまりにも暗号じみているけれど、各国の翻訳もやはりHHhH(エイチエイチエイチエイチ)になっています。

ハイドリヒはこの小説の最重要人物ですが、主人公ではありません。

Reinhard Heydrich

[1904—1942]

ナチス・ドイツの高官。1932年ナチス親衛隊(SS)に入り、保安諜報(ちょうほう)部(SD)を創設、責任者となる。ナチス政権成立後、国家秘密警察(ゲシュタポ)GestapoとSDが統合されると双方の組織を掌握、39年この組織が国家保安本部(RSHA)と改称されると初代長官に任命され、ナチスのテロ支配の総元締めとなった。42年1月、ワンゼー会議でユダヤ人絶滅のための「最終解決」が決定されるとその担当責任者に任命され、残忍な方法でユダヤ人の駆り集めを開始した。ボヘミア・モラヴィア(チェコ)保護領総督代理を兼ねていたが、42年5月、プラハ近郊でレジスタンス・グループの襲撃を受け、1週間後に死亡した。ハイドリヒの死後の6月10日、ドイツ軍は報復としてプラハ近くの寒村リディツェの住民全員を銃殺ないし強制収容所に送り込み、全村を焼き払い、ナチス・ドイツの残虐行為の代表的事件として広く知られるに至った。[藤村瞬一]Japan Knowledgeより

このハイドリヒを暗殺したレジスタンス二人が主人公です。その後のナチの凄惨な報復までを描いています。といってもこの事件に関しては『死刑執行人もまた知す』という名作映画もあるし、この本でもふれられている『謀議』。ケネス・ブラナーがハイドリヒを演じて共演がスタンリー・トゥッチ、コリン・ファースというテレビ映画とは思えない豪華な配役のドラマもあるのでそちらも見る価値はあると思います。

現在、公開されているTHE Man WITH the Iron Heart「ナチス第三の男」とかなり無理のある邦題(本当に第三?ヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒ?)の映画ではハイドリヒは女性問題で海軍を不名誉除隊になったとき、ベソをかいて婚約者のリナにもたれかかるほどのヘタレだ。気の強いリナは『ゴーン・ガール』でキュートなイカレ妻を演じたロザムンド・パイク。それが妻となるリナに叱咤激励されてナチに入り、第二の男ヒムラーに取り入り、出世の階段を登っていく。そしてチェコの副総督になったとき、在英チェコ軍のパラシュート部隊ヨゼフ・ガブチークとヤン・クビシュがプラハに投下され、潜伏しながら時を待ち、類人猿(エンスラプイド)作戦(ハイドリヒ暗殺計画)を実行にうつす。ヤンは匿ってくれるレジスタンスの家族の娘アンナ・ノヴァークと仲良くなり、婚約までするのだが、このアンナを演じるのがミア・ワシコウスカ(『アリス・イン・ワンダーランド』でアリスを演じた)。

小説と細かい部分が違うし、映画では大筋が理解しやすくなっていると思われます。西川美和監督が、実際にナチが飼養したベンツを映画でもきちんと使っているのに感動していた(企業イメージが悪くなくても、正しい歴史を描くのに協力するベンツという企業のプライド)。

この小説では作者とおぼしき作家が、歴史上のできごとを見てきたようにかいてもいいのか?もちろん歴史小説とはそういうものだ。でもそんなペテンのようなことはしたくない。事実のみにたって描きたい。と各所に饒舌に独白を述べています。私は歴史小説だと思っていましたが、この小説は純文学だそうです。純文学=芥川賞、歴史小説を含んだ娯楽作品=直木賞という区分けであるなら直木賞に近いのかしら?でも各所に文学作品に対する批評や感想が織り交ぜられ、文学的な思索の深さという意味では純文学とも言えるのか。でも、芥川賞受賞作品に感じるような気取った物言いというか、「文学は高尚なもの」という気取った雰囲気は感じられません。でもしゃべりすぎというか、扱った事件の深刻さに対するおしゃべりが許せないという人もいるかもしれません。私はこの軽やかな語り口でなければこんな、むごすぎる話を読む気にはとてもなれなかった。

この映画を見て、小説を読んで、本当に途方にくれるのは、苦労して苦労して自分の幸せを犠牲にして暗殺に成功しても、そのあとのおびただしい数の犠牲者。普通の軍人だったハイドリヒが怪物になったことも、ナチが平気で何千と人が殺せる、ユダヤ人のホロコーストは知っているけれど、自分たちの意に添わないチェコ人も容赦なく大量に虐殺できた事実。打ちのめされます。一つの村を消滅できるほど殺戮を実施したことで、国際社会を敵に廻したナチ政権は、それでもこのあと3年も存続します。ただ、この暗殺事件がなかったらナチの暴虐は他の国に知られることはなかった。ユダヤ人が送られた収容所で行われていたことも、普通のドイツ人は解放後「気づかなかった」とインタビューで答えていました。収容されていた人が「いいえ、あなたたちは知っていた」と反論していましたが。

日本軍がハルピンの731部隊で人体実験を平気で行っていたように、私たちはハイドリヒのような怪物になることができる。けれど私は死を覚悟しても暴虐を止めるガブチークとクビシュのような勇気ある行動はとてとれそうもない。けれどこの二人の行動を忘れずに、道を踏み外しそうな、恐ろしいことが起こる前に、おかしいと思うことには個々で声をあげていくことが必要ではないかと思っています。



彼らが命を落とした聖ツィリル・メトデイ正教大聖堂